

### 平和環境部

## 平和企画 第3回沖繩戦跡ツアー

平和環境部では、2月11日、12日に、沖繩戦跡ツアーを開催しました。

第3回目となる今回は、島民の集団自決の場となった渡嘉敷島と、新基地建设で揺れる辺野古を訪れました。

参加者から感想を頂きましたので、2号に分けて掲載いたします。

### 沖繩を二度と戦場にさせない

縮引 元(平和環境部員)

ケララ・ゾルーと呼ばれる透明度の高い海が広がる慶良間諸島、ザトウクジラの繁殖海域、ホエール・ウオチンゾグで賑わう「渡嘉敷島」を訪ねました。

日本軍の海上特攻艇の秘密基地になっていたようですが、慶良間諸島に米軍が上陸すると、日本軍の革命によって住民は「集団自決」に追い詰められ、渡嘉敷島では329人が亡くなりました。集団自決の生き残りを母に持つ方の案内で島を巡りました。「集団自決跡地」の碑の前で「再び悲劇を繰り返させない」と黙祷し、その後の斜面を降りた谷あいの村民が「集団自決」をした現場も案内して頂きました。

第二次世界大戦末期、日本本土防衛の捨て石とされた沖繩の戦場に、朝鮮半島から女性たちが日本軍の性奴隷に、男性が軍役の奴隷として連行されて来ました。米軍が海上特攻艇の秘密基地とされた慶良間諸島に上陸した前後に、日本軍により死を強制された「集団自決」と日本軍の迫害と虐殺により軍夫の犠牲は数百人に登り、慰安婦たちも非業の死とげました。住民とともに「朝鮮人軍夫」や日本軍「慰安婦」も祀る慰霊碑「白玉之塔」、さらに、悲惨な犠牲を強いられた女性たちを悼み心に刻むモニュメントが渡嘉敷島の人達を始め、多くの人達の協力で、過去の戦争の過ちを次代に語り継ぎ、反戦平和を誓うモニュメントでありつづ



渡嘉敷島・白玉之塔

けることを願う「アリアン慰霊モニュメント」が建立されていますが、犠牲になった朝鮮の人達への想いも込めた沖繩の人達の心の広さに触れることができました。

南西諸島の軍事要塞化が進められている中で、翌日は大浦湾の貴重な生態系をも生き埋めにする「辺野古」の新基地建设現場と米軍普天間基地に隣接する「佐喜真美術館」を訪ね、「原爆の図」の丸木位里・丸木俊が描いた「沖繩戦の図」の前で、「沖繩を二度と戦場にさせない」という思いを胸に知りました。

### 平成5年 3月28日???

五井 卓(平和環境部員)

沖繩戦の際、渡嘉敷島では320余名の人が集団自決(村民は強制集団死と言うそうです)を遂げた。その地に建てられた慰霊碑「集団自決の地」の碑文の最後に記された日付だ。

集団自決が行われたのは1945年(昭和20年)3月28日。それなのになぜ慰霊碑は平成5年(1993年)なのか。実は1951年に今と同じ地に多くの遺骨が埋葬され「白玉之塔」という慰霊碑が建立されていたという。しかし、米軍がホーク・ミサイル基地を造ることによって強制



集団自決慰霊碑にて

的に碑の移設を余儀なくされていたのだ。

日本軍により強制され死を選ばざるを得なかった渡嘉敷島村人。さらに死後米軍の軍事戦略のため安らかに眠ることさえ許されなかった。

翌日は那覇から辺野古へ。那覇から辺野古までは65km。国道58号線を北上し、途中から沖繩嘉手納線に入ると右側に広大な普天間基地(羽田空港の1.5倍)が広がる。国道の左側の樹木に覆われた丘陵地帯は普天間基地よりも広大な弾薬庫だという。さらに北上すると木々に遮蔽され見えないようにされているが嘉手納基地、嘉手納弾薬庫(それぞれ普天間基地の約4倍・5.6倍)と続く。その後キャンズ・ハンセン、キャンズ・シュワブと絶えることなく辺野古まで米軍基地が続いている。

辺野古基地建设現場では国道沿いに高い壁が数キロにわたり設けられ中を窺い知ることは出来ない。沖繩戦で沖繩県民の25%約12万人以上が犠牲になった。そして今

沖繩県には31の米軍専用施設があり、沖繩本島の15%の面積を占めている。国土面積の約0.6%しかない沖繩県に、米軍専用施設の約7割を押しつけている。そして、普天間基地の移設という名目でもまた新たな基地負担を沖繩県民に負わせようとしている。県民投票で70%以上の県民が反対したのにも関わらず。

今回のツアーを通して、過去・現在・未来と沖繩県民がいかに理不尽な常態を押しつけられているかを垣間見ることが出来た。

### 沖繩戦跡ツアーに参加して

五井 富子(会員家族)

「知ること」を再確認した時間でした。自分の目、耳、肌が直に触れることで感情が湧き想像力も広がる。今回の沖繩平和ツアーは「命」をどうとらえるか。その立

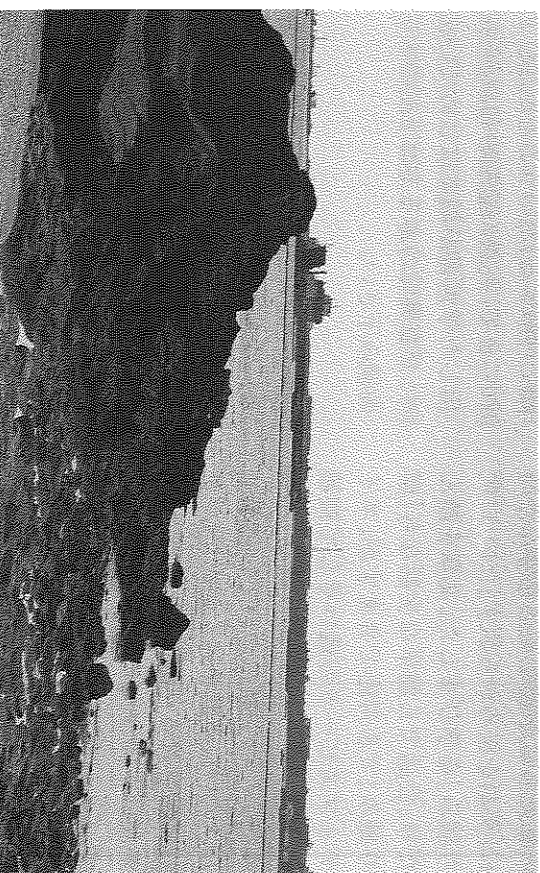
ち位置から守るものの違いをつぐく感じました。

渡嘉敷島の集団自決の跡地に立ち、語り部の米田さんからお話を伺いました。米田さんのお母様が語ったこと。どれほどの辛苦な状況だったのか。私自身が気がかりのある時、それも自分の中に大きなものである時はとても気が重く苦しくなる。お母様が恐ろしく怖く(負い目もあったことと思います)蓋をしていたものを開くことは、またそれを感じるということ。それがわかっていて語ってくれた米田さんのお母様の思いはどれほどのものだったのか。今の、未来の命を守るために伝えなくてはならないの思いが、苦しさや重さ怖さを超えるほどの大きさだったのだと受け止めました。その場所ですごい自分の耳で聴き想像し私の肌で感じその重さを知ることが出来たと思っています。旧日本軍赤松隊壕の説明には『処刑』の人数が記載されていていました。“うん？処刑と記す？”これは英語を話すことが出来たためにスバイとされ殺された方だと知りました。権力は何を守っているのか？今の日本、ロシア、イスラエルも・・・理不尽、憤り、悔しさ。どう言葉にしたらいいのか。

二日目の佐喜真美術館の丸木位里・俊さんは絵本で見ており気持ちの中では“見たくないなあ”の思いがありました。けれど画の前に立つと不思議な自分が居ました。フロフロとしたものより静かな深い怒りを感じました。どれほどの悔しさと痛みを抱え居続けたのだろうか。

空港でガイドの横田真利子さんが「足を運んで知ろうとしてくれている人達がいることは自分たちが頑張っただけでいい力に繋がります」と語られました。この平和ツアーに参加したことで、今までとは違った目で沖繩のニュースに関心を持つようになり、スマホには沖繩のニュースや辺野古の問題が多く示されるようになりました。

このツアーを企画してくださったことに感謝申し上げます。



大浦湾と辺野古

平和  
環境部

# 第3回沖縄戦跡ツアー

(前号つづき)

## あらためて知る沖縄の悲劇、 後世に残すべき戦争の 真実を学ぶ

間間 元(平和・環境部長)

2月11日からの2泊3日で、渡嘉敷島と本島の基地群・辺野古大浦湾を訪ねた。

平和・環境部として、今回で3回目となる沖縄戦跡ツアーである。なお1回目は本島の中部から南部の戦跡や米軍の普天間基地や嘉手納基地をめぐり、元ひびめゆり学徒隊の生存者2名の話や貴重な機会となった。2回目は北部離島の伊江島を訪ね、高江の米軍ヘリポート基地にも足を運んだ。

3回目となる今回は、集団自決が行われた慶良間諸島の渡嘉敷島、さらに辺野古の米海兵隊新基地建設の現場を訪ねた。

渡嘉敷島は那覇から高速船で40分。村役場からの紹介で米田英明さんという地元の方が一泊付き合ってくれた。現場に案内されて初めて分かったのだが、この方の母親が17歳の時に330人の集団自決の惨劇から生き残った一人だったのである。慶良間諸島の集団自決が軍の命令で強制されたという記述を削除した2007年の教科書検定問題で11万人の県民抗議集会が行われるまで、米田氏の母親は決してこの体験を家族にも話そうとはしなかったという。それを変えたのが教科書問題であり、生徒に嘘を教えるはいけないと自ら口を開いたという。その後97歳まで生き抜いた母がもしあの時自決していたならば自分にはいなかった、感謝しかないと言ってくれた。

また住民の大多数が集団自決に追い込まれたのは、「鬼畜米英(兵)は男を虐殺し女とみれば強姦暴行する」との軍の脅しに騙され絶望の淵に追いやられただけではない。住民が米軍に捕まると軍の存在を知られることを恐れ、住民を銃で脅して逃がさなかったということも大きい。このため米軍の銃弾の犠牲になった住民



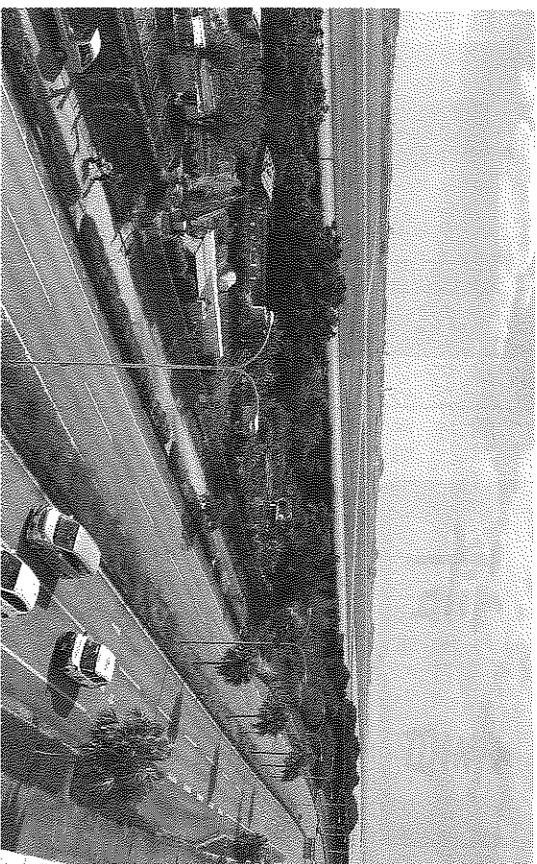
渡嘉敷島山中の日本軍避難豪

も少なくなかった。事実、日本軍がいなかったいくつかの島では集団自決は起こらなかった。

自決の現場は村の戦跡として当時のままに保存され、「集団自決跡地」の石碑と説明版が設置されており、私たちは献花と黙とうを行った。その近くの日本軍守備隊の壕や海岸の特攻艇格納壕なども村が保存していた。その後は国立公園にもなっている渡嘉敷の貴重な自然を帰りの時間まで案内していただいた。

翌日は米空軍の嘉手納基地と海兵隊の普天間基地を巡り、普天間基地に隣接の佐喜真美術館で丸木位里・俊の沖縄戦の図を鑑賞し、辺野古新基地の工事現場を大浦湾側からも訪ねた。巨大な工事船や監視船の姿はあったが休日の静かな海であった。沖縄県民の多くがすでに戦後生まれとなっており、沖縄戦の体験を語る人々もいずれ姿を消すことになり。再び沖縄を戦場にするなどという思いは沖縄県民の声であることは間違いない。「日本軍がいなければ集団自決はなかった」「軍隊は住民を守らない」「命(ぬち)どう宝」という沖縄戦の痛切すぎる教訓は今も県民の中に生きている。

今、西南諸島の自衛隊基地の新設・強化が急速に進められている。沖縄が再び戦場になるということは、日本が戦場になるということであり、絶対に未然に防止しなければならぬという決意を新たにしたい。



「道の駅かてな」から見る嘉手納基地

## 沖縄の不条理な 現実を直視してほしい

佐野 亮行(平和・環境部長)

以前からこのツアーに参加していたが、なかなか機会がなかった。このたび、コロナ騒動もようやく下火となり、企画されたので参加した印象を述べてみる。

### 渡嘉敷島と集団自決の跡

沖縄を本土防衛の捨て石とし、米軍との接触の最前線と予定された渡嘉敷島では、住民が軍の労働者として扱われた。最後には足手まといとなったり、捕虜になって、スバイとして戻ってくる恐れがあると軍人は認識したようだ。そのため、戦前の状況が絶望的になったとき、軍の下級司令官は住民に死ぬことを強制したとされている。自分たちが守るものは、天皇を代表とする国家であり、軍隊という組織が大切だった。軍は国民を守るためにあるのではなく、国体を守ることに邁進した。そうやって本来守るべき国民を守らずに、ずるずると撤退を繰り返し、最終的には米軍に投降して、生きながらえた。軍人は自分で考えることを許されず、ただ命令に従うしかなかったから、そう言ったというのはただの言い訳にしか聞こえない。それまでの人生で、自ら考えることをせず、ひたすら命令に従って機械のように職分を遂行してきたからそんなことが起きたのだらうと考える。そして、それらを自分の名において命令していることを知りながら、許してきた天皇の責任！自らが大元帥であるならば、そこに至らないうちに国民のために頭をさげ、自らを差し出すべきではなかったのか。先祖からの無言の呪縛にとらわれていたとしても言い訳するのか。戦争が終わってからも、いかなる慰霊の旅を続けようとも、その罪が許されるわけではない。

このほか、兵士が潜んで過ごした洞窟や、水上特攻艇を隠した海辺の洞窟なども廻った。今は白いサンゴの砂からできた穏やかな浜である



住宅地に囲まれる普天間基地

が、ここがかつては殺し合いの海だったと想像すると、いつまたその再現が起こるかはわからないと思っただ。

### 那覇周辺の戦跡と普天間、辺野古

翌日は那覇の街中で米軍が上陸し制圧するまでの旧日本軍の陣地跡や、今も米軍基地が蚕食する町の様子を案内された。町中至る所に米軍の基地を囲う2重のフェンスがあり、緑の木立の大半は基地の姿を市民から秘匿するための目隠しである。普天間基地には展望台まで設置され、航空機ブーンは喜んで各種の米軍機を撮影している。まさに米国に日本人が観光旅行しているような錯覚に捉われる。この日は訓練も休みで、騒音はなかったが、間近の上空を休みなく軍用機が飛んでいる状態は、誰も望まぬには違いない。米軍に、日本の法規を守らずともよい自由を与え、占領地と同様の扱いを許しているのは日米地位協定である。世界中で、いかなる同盟国にも存在しないような自由度を与え続けている日本の歴代政府の姿勢には、独立国としての明らかなき瑕疵がある。それを国民に意識させないよう隠ぺいしてきた政府の責任もある。

その後、辺野古の海辺に移動した。こちらも最近では反対運動の参加者が常時いるわけではなく、警備員が所在なさそうに立っているだけだった。ただ、本来なら沖縄ブルーの海は、土砂投入の影響を受けて黄色を帯びて濁り、このまま工事が続けば貴重なサンゴ礁も消えてしまうのは必定である。

ともあれ、初めて目の当りにした沖縄の不条理な現実を、私を圧倒している。多くの人々に、この状況を現場で直視してほしいと考える。保険医協会のツアーは、強行軍ではあるが、準備万端至れり尽くせり、エスコートしてくれた協会職員の方には本当に感謝しかない。今後も継続して催行され、多数の参加者があ